塩谷昌弘准教授／比較文学、日本近代文学

# 文学部 日本文学科

# 「表象」＝「表現されたもの」から探る日本の文学

文学部　日本文学科
准教授
塩谷（しおや）　昌弘（まさひろ）

石川啄木の表象研究を中心に、東北地域・岩手県に関わる文学者の研究を行う。東京都出身。2012年より盛岡大学文学部助教、2017年より同准教授。

Faculty & Research

## 知られざる郷土の作家を記録するのも自分の役割

石川啄木の表象研究をメインに、現代作家を含む東北地方や岩手に関わる文学者の研究に取り組んでいます。表象研究とは、ある対象がどのように表現されているかを検証する研究手法です。その対象がこれまでどう描かれたり、論じられたり、研究されてきたか、その背後にある思想や文化的背景を探りながら調べています。

また最近では、岩手日報社の「北の文学」に、釜石市出身の作家・小林美代子について寄稿しました。家族の病気や破産、自身の病気など幸せとはいえない人生を送り、50歳で作家としてデビューし、56歳で自ら命を絶った作家が、幸せに過ごした釜石での幼少時代を時代背景も含めながら考察しました。地元でもほとんど知られていない作家ですが、人々に記憶されるべき郷土の作家の一人だと思っています。

## 子ども向け偉人伝から探る、石川啄木の表象の変遷

今取り組んでいるのは、児童向けの伝記や偉人伝において、石川啄木がどう描かれてきたかを探ることです。幼少期の天才ぶりや「一握の砂」などで知られる歌人ですが、その人生は決して品行方正な面ばかりではありません。戦後、急に子ども向け偉人伝などに多く収録されるようになったのはなぜなのか、どんなふうに子どもたちに向けてプレゼンテーションされているのか、どんな目論見を持って紹介されているのかなど、啄木表象の変遷をたどっていこうとしています。現在はリストアップの段階です。アニメ史やマンガ史ともクロスさせながら、研究を進めたいと思っています。

文学研究はすぐに役立つものではないかもしれませんが、文化的な基盤を守り、作っていくものだと考えています。

## Episode　趣味の山登りを通して、岩手山の表象について考える

趣味は山登り。県内外のいろいろな山に登りました。岩手の名峰・岩手山も、多くの作家や歌人、詩人の作品に登場します。宮澤賢治の詩や短歌に登場する岩手山は、臨場感がありますが、石川啄木の岩手山は具体性がなく、下から見上げている感じ。「啄木は岩手山に実際に登ったか否か」という論争が存在するほどです。実際に山を歩くことでその表象のあり方に疑問を持ち、明治期の岩手の文芸誌を調査し、岩手山表象に関する論文も書きました。趣味と研究の一石二鳥ですね。